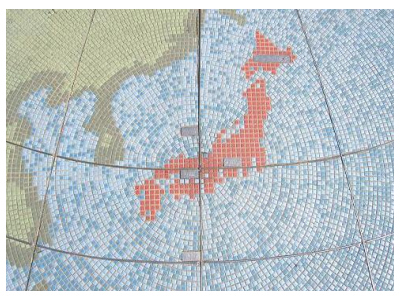
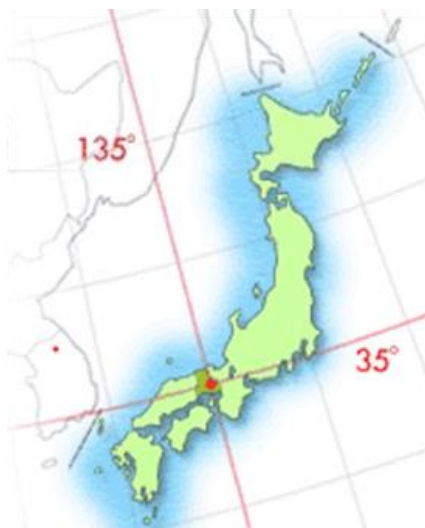


日本のへそ



西
脇
市



■ 「日本のへそ」西脇市

西脇市は、兵庫県のほぼ中央、中国山地の東南端が播磨平野に接する地点にあり、周囲を山地や丘陵に囲まれた自然豊かな地にあります。市域の中央部を県内最長の加古川が南流し、杉原川・野間川が合流する地点に市街地が開け、200年余りの伝統を誇る「播州織」と伝統技法に支えられた「播州釣針」を基幹産業に発展してきました。

市のやや東部には東経135度、北緯35度の交差点があり、ここが日本列島の中心にあたることから「日本のへそ」として広く内外にPRしています。こうしたことから「日本のへそ」を郷土の財産に、西脇市ならではのまちづくりを積極的に進めています。

市制施行	平成17（2005）年10月1日 ※旧西脇市 昭和27（1952）年4月1日
面積	132.44km ²
人口（平成31年4月1日現在）	40,684人（男19,613人、女21,071人）
世帯（平成31年4月1日現在）	17,141世帯
日本のへそ（上比延町364番地の2）	東経135度、北緯35度、海拔63m
市章	平成17（2005）年10月1日制定
市の花「しばざくら」	平成18（2006）年3月25日制定
市の木「さくら」	平成18（2006）年3月25日制定
都市提携（友好親善都市）	北海道富良野市（昭和53（1978）年10月20日）
〃（姉妹都市）	アメリカ・レントン市（昭和44（1969）年7月11日）



市章（平成17年10月1日制定）



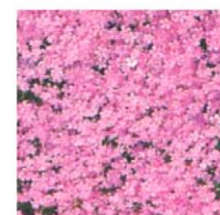
旧西脇市の市章を継承しています。2つの「シ」を図案化して「ニシ」を表し、市内を流れる2つの川（加古川・杉原川）の合流地にひらける西脇市の飛躍と調和を象徴しています。

市の木「さくら」（平成18年3月25日制定）



日本を代表する花木であり、四季を通じてさまざまな装いを見せる。咲き誇る花の麗しさと泰然とした風格を持つその姿は広く市民に親しまれています。

市の花「しばざくら」（平成18年3月25日制定）



織物を敷きつめたような美しい花と紅葉の柄模様は播州織の中心地である西脇市にふさわしい花です。



◀ 西脇市街地

■ 「日本のへそ」のはじまり

大正8（1919）年8月、多可郡で行われた小学校数学教師の研修会で、講師として招かれていた東京高等師範学校附属小学校（現在の筑波大学附属小学校）の肥後盛熊（ひごもりくま）先生が、「私は、前々から一度この地へ来たいと思っていました。ここには、日本の中心にあたる東経 135度と北緯35度の交差点があるからです。その場所は、加古川にかかる津万村と比延庄村を結ぶ橋の上流で左岸の河川敷です。」と具体的な場所まで指摘されました。



▲ 肥後盛熊先生

当時の地理上の出来事をみると、

明治17（1884）年	イギリス・ロンドンのグリニッジ天文台が世界標準時に決定（経度0度、北緯51度28分38秒）
明治19（1886）年	日本標準時が東経 135度に決定
明治20年代	日本の本格的測量（三角測量）が確立
明治30年代	5万分の1の日本地図が完成

ということから、地元の先生たちは、肥後先生があまりにも詳しく説明されたことに大変驚きました。「へそ」のはじまりは、この肥後先生の発言から始まったと言えます。当時すでに5万分の1の日本地図が印刷発行されていたので、肥後先生は読図して現地の状況を語られたものと思われます。こうして後の大正の大測量、経緯度交差点標柱建立へと発展していったのです。

■ 経緯度交差点標柱（大正のへそ）の建立が決まる

大正11（1922）年、肥後先生が指摘された中心地に多可郡教育会の学制頒布50周年記念事業として「東経百三十五度北緯三十五度交叉點海拔六十三米標識」と記した標柱の建立が決まり、翌年建てられました。

交差点の位置の確認は、陸軍参謀本部陸地測量部の技師小野原次郎、大野幸太郎両氏が行い、また標柱の文字の揮毫は、時の呉鎮守府司令長官・鈴木貫太郎海軍大将（後の内閣総理大臣）が行いました。



▲ 終戦当時の経緯度交差点標柱

■ 大正の大測量と標柱の建立

大正12（1923）年、陸軍参謀本部陸地測量部は、日本の中心点の測量に当たりました。測量の時期や作業にあたった正確な人数はわかりませんが、詰襟の服を着た二人の技師が三脚を立てたり、大きな赤い旗を持った人たちが山を登り下りしたりと大測量だったということが伝わっています。

大正13（1924）年1月27日、比延第一小学校において標柱の竣工式が挙行されました。標柱完成後、周囲の清掃、草刈りは地元上比延町青年会が中心になって、戦前まで定期的に行われていました。また、播丹鉄道（現在のJR加古川線）が付近を走るようになってからは、各駅には啓発チラシが貼られ、兵庫県のお国自慢として大変有名になりました。

しかし、戦争によってその存在が忘れられ、戦後は湿地の中に記念碑がポツンと立ったままでした。



▲ 経緯度交差点標柱

▼ へそ地点



■ 「へそ」の復活

西脇市が「へそのまち」として再デビューしたのは、昭和52（1977）年のことです。

西脇市制施行25周年のテーマであり、当時兵庫県が提唱していた「ふるさとを見直そう運動」を展開する中で、「日本のへそ」を再認識することとし、大規模なキャンペーンを展開しました。

昭和53（1978）年 2月	●「日本のへそ」は正確だった 建設省国土地理院近畿測量部長らが「日本のへそ」を再計測 国土地理院長から「正確な位置であり、先人の偉業に敬意を表する」というメッセージをいただきました。
昭和53（1978）年 3月11日	●「経緯度を考える市民のつどい」 「日本のへそ」が持つ地理学的・天文学的な価値を内外にアピールするため 「経緯度を考える市民のつどい」を開催 西脇市のセールスポイントに「日本のへそ」を再認識し、大々的にキャンペーンをすることになりました。 ●「日本のへそ」シンボルマークを制定 日本列島を小鳥でデフォルメした「日本のへそ」シンボルマークを制定 全国 162点の応募から、西脇市の吉田稔美さん（西脇高校1年）の作品が最優秀作品としてシンボルマークに採用されました。 ●タイム陶板を埋設 21世紀の人々へのメッセージと、西脇市の現況をタイム陶板に刻んで埋設しました。開扉は50年後の2028年3月11日です。 陶板は、地元の金城焼（かなしろやき）の荒子窯の初窯で焼き上げたもので、次のようなメッセージが刻まれています。 1. 21世紀の世界はアジアから 1. 21世紀のアジアは日本から 1. 21世紀の日本は西脇から 日本の中心地に住む西脇市民はここに気宇広大な矜度をもって、「緑と清流の文化・工芸都市」づくりに向って邁進する決意を宣言する。 1978年3月11日（土） 西脇市長 高瀬 信二



▲ タイム陶板の埋設

▼ 経緯度を考える市民のつどい



▲ 「日本のへそ」のシンボルマーク

「経緯度を考える市民のつどい」で制定されたシンボルマーク。小鳥は、日本列島をデフォルメし、豊かな自然を表現。小鳥がくわえるのが北緯35度、縦に子午線、その交点が西脇市を表しています。

■ 「へそ」がとりもつ友好都市親善

昭和53（1978）年10月20日、「北海道のへそ」を標榜する富良野市と西脇市は「へそ」がとりもつ縁で友好都市親善協定を結びました。以来毎年恒例のお祭りやマラソン大会に参加するなど多くの市民が積極的に交流しています。また、平成14（2002）年度には、職員を相互派遣するなど、行政部門においても積極的な交流を図っています。

● 北海道のへそ「富良野市」

位 置： 東経 142度22分、北緯43度20分
面 積： 600.71平方キロメートル

人 口： 約2万2千人
基幹産業： 農業、観光業



▲ 富良野市との友好都市親善協定



▲ 北海へそ祭り（富良野市）

■ 「日本のへそ・子午線マラソン」大会の開始

昭和53（1978）年12月3日、経緯度交差点付近を発着点にした西脇市ならではのマラソン大会が始まりました。現在まで続いているこのレースには毎回、市内だけでなく、県内・県外から多くのランナーが参加しています。

※令和3（2021）年で終了しました。

（令和2（2020）年、令和3（2021）年は中止）



■ 「日本のへそ」に“杭”を打ち込む

昭和54（1979）年7月1日、当時移動芸術を唱えるドイツ人芸術家ヘルムート・ベッテンハウゼン氏がワールド・ワイド・アート・アクションと称する杭を「日本のへそ」に打ち込みました。この杭は、世界各地の名所に打ち込んでいるもので、アジアでは「日本のへそ」が初めてでした。また、ロマンを秘めた杭の台石を後に「メルヘン石」と命名しています。



■ 「日本へそ公園」に改称

昭和58（1983）年1月25日、既存の岡之山公園の区域を経緯度交差点まで拡大し、「日本へそ公園」と改称し、総合公園として整備を進めていくことを決定しました。

■ 「西脇市岡之山美術館」 オープン

昭和59（1984）年10月9日、拡大した日本へそ公園内に「西脇市岡之山美術館」がオープンしました。

日本でもっとも革新的な創作活動が続けている西脇市出身の美術家、横尾忠則氏の作品を収蔵展示するアートスペースとして誕生しましたが、平成25（2013）年からは、新しく現代美術の展示拠点となっています。

美術館の外観は加古川の対岸から見ると、まるで三両連結の列車が加古川線のホームに停車しているかのように見え、東側には曲線豊かなアトリエ、西側にはピラミッドパワーを生み出す場として瞑想室が設けてあります。設計は世界的建築家、磯崎新氏の手によるもので、館内に一歩足を踏み入ると、横尾芸術一色の衝撃的な色彩が眼に飛び込んできます。

作品は美術館の中だけにとどまらず、屋外にもあります。正面には、縦 3.6m、横 7.2mのコンクリート壁を建て、横尾さんの原画を拡大したセラミック製の陶板（60センチ四方）72枚を張り詰めて壁画を構成しています。この壁画には、アメリカのパフォーマンス・アーティスト、リサ・ライオンをモデルにして、美術館やその周辺で行われたパフォーマンスが描かれています。

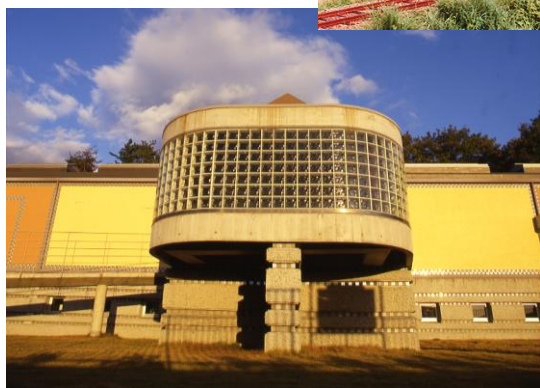
開館から1年半後の昭和61（1986）年5月には、企画展として「横尾忠則、三宅一生をデザインする」が開催され、世界的デザイナー三宅一生氏の手によるファッションショーが開催されました。

さらに現在は、3年に1度、小さくてもきらりと光るサムホールサイズの芸術作品を全国公募する「西脇市サムホール大賞展」を開催するなど、展示スペースだけにとどまらず、横尾忠則氏の公開講座の開催をはじめ、地域の文化拠点として盛んに芸術・創作活動も展開しています。

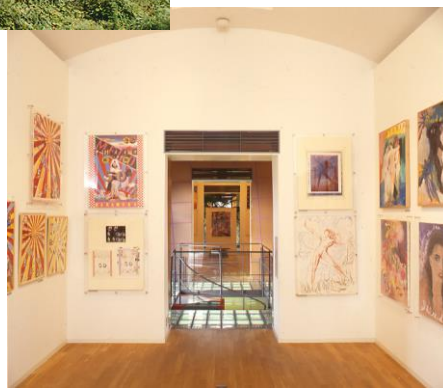


◀ オープン当時の外観
（日本へそ公園駅未設置）

▼ 瞑想室



▼ ギャラリー



▲ セラミックの陶板



▲ 正面玄関からの外観

■ 「日本へそ公園駅」 開業

昭和60（1985）年5月4日、国鉄加古川線比延～黒田庄間に「日本へそ」（仮称）駅を設置するための起工式が行われました。起工式には市長をはじめ関係者約200人が出席し、上り列車の汽笛を合図に「日本のへそで会いましょう」の手紙をつけた風船を比延保育園の園児たちが大空に飛ばし、「日本のへそを郷土の財産にとどめず、日本の、世界の財産として心の絆を結ぼう」と市議会議長が高らかに“へそ宣言”を行いました。

同年7月15日に「日本へそ公園駅」が開業。開業イベントは、西脇駅午前4時57分発の谷川行の一番列車で開幕し、「一番列車に乗ろう」の呼びかけで、始発の西脇駅から乗り込んだ市民らが、午前5時14分、日本へそ公園駅に初めて停車した一番列車で下車しました。

駅舎は、列車が3両停車できる長さ74m、幅2.5mのホームがあり、当初は、イベントごとに列車が停車する臨時駅でしたが、その後昭和62年（1987）12月26日に常設駅となりました。

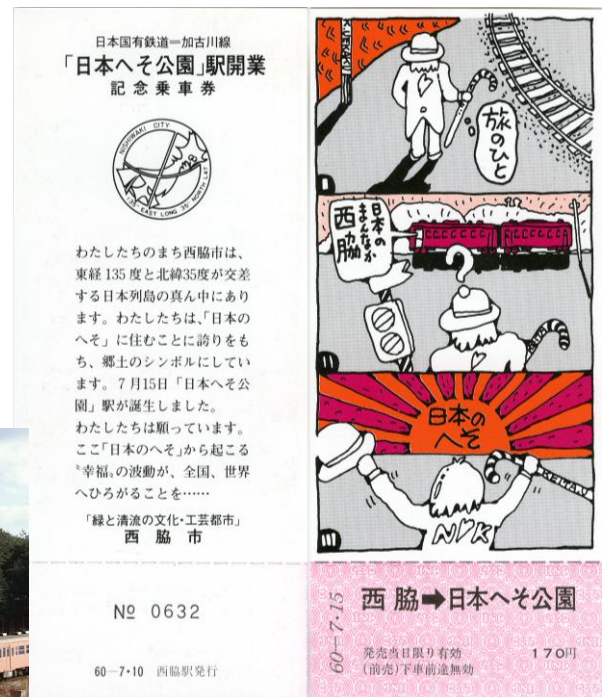
「日本へそ」というユニークな名前を付けた駅名は全国、世界を探してもここ西脇市だけです。鉄道関係者を選出する「近畿の駅100選」にも名を連ねており、ここ日本へそ公園は、川と線路だけでなく、公園内に駅もあるというめずらしい場所となっています。



▲ 駅の開業セレモニー



◀ ▲ 開業直後の駅の外観



▲ 開業記念乗車券

■ 「日本のへそまつり」が始まる

昭和62（1987）年8月8日、日本へそ公園駅開業2周年を記念して、「第1回日本のへそまつり」が開催されました。

日本へそ公園周辺での子どもスケッチフェスティバル、西脇駅から関係者や多くの来賓、市民の方たちがペインティング列車に乗り込み、列車内で西脇小学校オーケストラの演奏が行われる中、日本へそ公園駅へ到着しました。また、岡之山美術館前では民謡コンクールや力強い太鼓の演奏・太鼓フェスティバル、へそバザールが行われました。現在まつりは、西脇市の夏の風物詩である「へその西脇・織物まつり」に引き継がれ、日本へそ公園周辺は、前夜祭の会場として花火をはじめさまざまなイベントの会場となっています。

■ 「日本のへそです」大作戦の展開

平成元（1989）年4月27日、地域の各分野の有識者の方々と構成する「ふるさとづくり推進市民会議」が設置されました。委員会では、西脇市らしいふるさとづくりのテーマは何か、どんな事業を展開するのがふるさとづくりなのか、を真剣に話し合いました。

「ふるさとづくり推進市民会議」には、原案づくりを担当する企画委員会が設けられ、テーマ選定や事業計画などを研究、その結果、西脇のふるさと創生のテーマを「日本のへそです」大作戦と決定し、同年8月10日に西脇市長に事業案を記載した最終報告を提出しました。

○ 「日本のへそです」大作戦事業案

テーマ	具体的な事業案
経緯度を学術的な意義で考えよう	・子どもに星への夢をふくらませるため、天体望遠鏡を備えた「地球科学館構想」の充実を図る。 ・「平成の地球大測量」ーグリニッジの経度、赤道の経度を基準にした東経 135 度北緯35度の交点を、人工衛星を利用して測量する。測量時にはイベントやクイズ大会を実施する。 ・遠くからでも「日本へそ公園」がわかるシンボルを設置する。 ・「地球科学館」の情報収集
子午線を大切にす るまちづくり	・時間を大切にする市民運動ールーズな意味において使われている西脇時間の撤廃 ・「おもしろ時計」を設置し、時間を守る市民運動やまちのシンボルとする。設計についてはコンペ方式でアイデアを募集する。
日本のへそに住む 自負を高めよう	・市民運動の展開ーまちの活性化のため、土産・うまいもの・名所づくりなどのテーマを決めて推進会議をつくる。 ・シンポジウムやパネルディスカッションなど「日本のへそ」の意義を学ぶ催しを開催する。 ・日本の中心から情報発信ー「日本のへそ」情報として、産業・文化など西脇市からの情報発信を密にする。また、パソコン通信などの利用を検討する。 ・へそイベントを全国規模で行う。
他地域との交流	・子午線、北緯35度線上の都市との交流。へそサミットの開催 ・世界標準時子午線の通るグリニッジ、古代世界の中心といわれたギリシャ・デルフィとの交流の推進

■ 平成の地球大測量ともうひとつのへそ「平成のへそ」の誕生

平成2（1990）年3月20日と21日の両日、楽しみながら「日本のへそ西脇市」を愛する気持ちを育てようと、ふるさと創生「日本のへそです」大作戦を実施しました。

メイン事業は、国土地理院の協力で行った平成の地球大測量。アメリカが打ち上げた人工衛星の軌道情報を分析し、経緯度を求めるGPS測量（汎地球測位システム）による東経 135度と北緯35度の交差点を測量しました。

その結果、経緯度交差点標柱（大正のへそ）から、南東方向へ



437.6mの岡之山中腹の位置に「もうひとつのへそ」（平成のへそ）が発見されました。このほかにも「天体望遠鏡で宇宙を探そう」、「オープンプラネタリウムを楽しもう」、「日本のへそで気球に乗ろう」、「地球と宇宙を学ぼう」、「クイズにチャレンジ」などのイベントが開催され、2日間で計 1,500人が楽しみました。

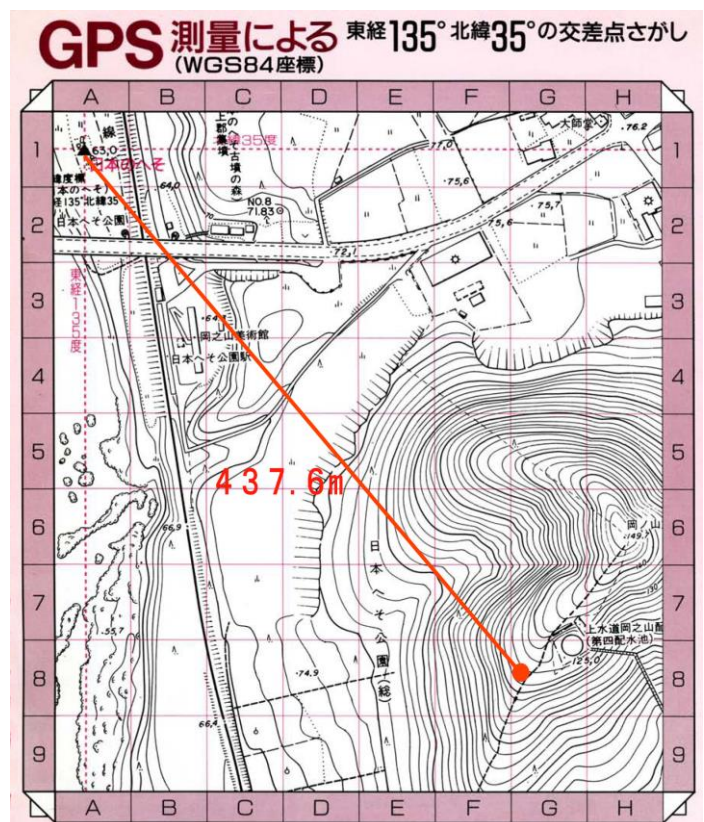
またこうしたイベントの実施によるまちづくりに大きな功績があったことから、平成2（1990）年6月には国土地理院長から功労表彰を受けました。



▲ 「日本のへそです」大作戦パンフレット



▲ メインイベント「平成の地球大測量」



▲ GPS測量による交差点は、真北から 144度16分の東南の方向へ 437.6mの地点。この地点に、モニュメントを建設する予定としました。



▲ GPS測量による交点に杭を打つ石野市長（当時）

■ 「世界のへそ」との友好

平成3（1991）年3月16日、古代世界の中心を示す「へそ石」があることで知られる、ギリシャ・デルフィとの友好を図るため、コンスタンティノス・ヴァシス駐日ギリシャ大使ら一行5名を「日本のへそ」に招待しました。

■ にしわき経緯度地球科学館「テラ・ドーム」オープン

平成5（1993）年6月1日、21世紀に向けての夢を語れる施設として、にしわき緯緯度地球科学館「テラ・ドーム」がオープンしました。建築設計は世界的な建築家である毛綱毅曠氏が手がけました。

「日本のへそ」の持つ地理的、地球的な意義を明らかにし、科学と芸術との新しい出会いの場を創造するというコンセプトから生まれたのが「経緯度地球科学館」です。地理的要素である「経緯度」を切り口に、地球の内と外から探ることを基本的な考え方として施設を構成しており、地球そのものと経緯度をひとつのテーマにした科学館は、全国でもはじめてのケースで、大変ユニークなものです。

国内最大級の口径81cmの反射望遠鏡を備える天文台や、映像ホール、展示室なども設けてあり、地球のすばらしさや宇宙の神秘を知ることができます。

長いアプローチ部分は、経緯度の交点「日本のへそ」に向かう軸性に沿わせ、それと直行して本館棟と天文台棟、宇宙からの視点によるアースワークを意識した三角形の「科学の池」に浮かぶ映像棟の三棟の建物によって構成しています。映像棟は水の惑星“地球”、本館棟は迎月台として外観で円弧を描く“月”をイメージしています。さらに中庭には横尾忠則氏デザインの十二宮の星座をイメージした柱のオブジェが立ち並び、いわば、地球、月、星座のシンボルマップを印象づける斬新な科学館となっています。

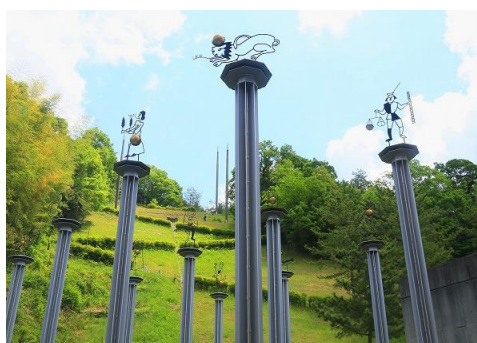
この施設のオープン記念として「宇宙科学フェスティバル」を開催。スペースシャトル「エンデバー号」に搭乗し、宇宙実験を行った毛利衛氏を招き、小中学生を対象とした“宇宙授業”や、大気保全と青空を守るためのイベント「星空・あおぞら大会 IN 西脇」を開催しました。

現在では天体観測会や子ども科学教室、星まつりなどのイベントが開催され、子どもから大人まで学び楽しめる場として、また、科学への興味・関心を深める場として多くの人に親しまれています。

▼ テラ・ドームの外観



▼ 展示スペース



▲ 十二宮の星座



▲ 口径81cmの反射望遠鏡

■ 「日本のへそ」にモニュメント登場

平成7（1995）年4月21日、日本へそ公園内で「日本のへそモニュメント（平成のへそ）」の竣工式が行われました。平成2（1990）年のふるさと創生事業「日本のへそです大作戦」の「平成の地球大測量」で測量された“もうひとつのへそ”（平成のへそ）地点へのモニュメントの建立です。

ここには守護神の槍をイメージした高さ25.3メートルの4本の柱が四角形に配置されており、柱で囲まれた部分には21.1メートルの正方形の庭園部分があります。そして庭園部分には、4つに区切るチタン製のラインがあり、東経135度と北緯35度の交差点を示しています。

このモニュメントの特徴は、地盤の地質的な移動に着目しながら、日本の中心を神秘的なイメージで表現している点です。

日本列島の移動は100年でおおよそ1.5メートル。そこで市内を流れる「加古川」「杉原川」「野間川」の3つの河川から採取した河原石100個を1.5メートル間隔で縦横10個ずつ、基盤の目状に並べ、100年ごとに一番外側の正方形に並ぶ河原石を敷石に置き換えていきます。すなわち日本列島の移動距離と同じ分が敷石に置き換えられていくことになります。

取り外した河原石は元の3つの河川に戻されることとなっており、時間の推移や自然の回帰を表現しています。また、正方形の中心に置かれている琥珀原石は時の流れとともにすり減っていくため、地理上の中心の移り変わりを表現しています。

したがってこのモニュメントは100年ごとにその姿を変えていき、500年もの歳月をかけて完成するという壮大なスケールのものなのです。このモニュメントをデザインしたのは、日仏友好モニュメントの設計者でもあるフランスのパトリック・ベルジェ氏。ベルジェ氏は、サンテチエンヌ大学の教授であるとともに、建築家・都市計画家としても世界的に活躍している人物です。



▲パトリック・ベルジェ氏

◀ 日本のへそモニュメント（平成のへそ）



▲ 上空からのモニュメント



▲ テラ・ドームとモニュメント

■ 大型科学遊具広場「宇宙っ子ランド」

平成7（1995）年7月5日、日本へそ公園内に「宇宙っ子ランド」がオープンしました。この広場には、ジャンボ滑り台のほか、重力や遠心力などの科学を楽しく、遊びながら学べる遊具がそろっています。

ジャンボ滑り台の材質にはすべてアルミを使用し、3コースの全長は約220mの長大なすべり台です。ローラー面には、虹の七色を使用しており、子どもたちにも人気を博しています。すべり台を滑り降りると、宇宙遊泳をしているような気分が体験でき、ブラックホール（砂場）へとすいこまれていきます。

また、平成22（2010）年には「ふわふわドーム」を設置し、休日には多くの子どもたちが楽しんでいます。



■ レストハウスのオープン

日本へそ公園駐車場の北側に、平成6（1994）年5月にレストハウスが完成しました。鉄骨造り平屋建て、延べ面積247㎡で、公園の樹木に調和するように黒い屋根と、外壁にレンガ風タイルを施した北欧風の建物に仕上げられています。

運営は民間事業者が行っており、中にはゆっくりと食事のできる客席が60席ほどあり、黒田庄和牛など地元の特産品を使用したメニューを取り揃えています。



■ 全国へそのまち協議会の設立・へそサミットの開催

平成9（1997）年11月7日、旧西脇市が市制45周年を迎えたこの年、全国各地で「へそ」「中心」「重心」などをアピールし、ユニークな地域づくりに取り組んでいる自治体が集結し、地域振興やお互いの交流を深める組織として「全国へそのまち協議会」が設立されました。

同日には、西脇市で協議会に加盟する自治体の首長が集い、「全国へそのまちサミット西脇大会」を開催しました。これを皮切りに、加盟自治体を会場に、毎年協議会や観光物産展などを開催し、へそに関することや地域づくりについて話し合い、連携して全国に「へそ」を発信しています。

また、平成23（2011）年10月には、加盟市町村が全国に点在しているという地理的特性を生かし、災害時の物資提供や復旧活動への職員派遣などを定めた災害時相互応援の覚書を締結しました。



○ 「全国へそのまち協議会」構成市町村 （平成31（2019）年4月1日現在）

標榜名目・キャッチコピー	都道府県名	市町村名
北海道のへそ	北海道	富良野市（ふらのし）
福島へのそ	福島県	本宮市（もとみやし）
日本列島の中心	栃木県	佐野市（さのし）
日本のまんなか	群馬県	渋川市（しぶかわし）
日本の真ん中 人が真ん中	山梨県	中央市（ちゅうおうし）
紀伊半島のへそ	奈良県	吉野町（よしのちょう）
日本のへそ	兵庫県	西脇市（にしわきし）
岡山のまんなか	岡山県	吉備中央町（きびちゅうおうちょう）
九州のへそ	熊本県	山都町（やまとちょう）
沖縄本島の中心	沖縄県	宜野座村（ぎのざそん）

○ 「全国へそのまちサミット・総会・物産展」開催市町村

開催回	開催市町村	開催日
第1回	兵庫県西脇市	平成9（1997）年11月7日(金)～8日(土)
第2回	北海道富良野市	平成10（1998）年7月27日(月)～28日(火)
第3回	群馬県渋川市	平成11（1999）年7月22日(木)～24日(土)
第4回	熊本県蘇陽町（現 熊本県山都町）	平成12（2000）年8月3日(木)～5日(土)
第5回	山梨県石和町（現：山梨県笛吹市）	平成13（2001）年8月20日(月)～22日(水)
第6回	徳島県池田町（現：徳島県三好市）	平成14（2002）年7月19日(金)～21日(日)
第7回	沖縄県宜野座村	平成15（2003）年10月24日(金)～26日(日)
第8回	栃木県田沼町（現 栃木県佐野市）	平成16（2004）年11月5日(金)～7日(日)
第9回	兵庫県西脇市（※ 会場は神戸市）	平成18（2006）年2月25日(土)
第10回	北海道富良野市	平成18（2006）年7月28日(金)～29日(土)
第11回	群馬県渋川市	平成19（2007）年7月27日(金)～28日(土)
第12回	熊本県山都町	平成20（2008）年9月6日(土)～7日(日)
第13回	栃木県佐野市	平成21（2009）年11月7日(土)～8日(日)
第14回	沖縄県宜野座村	平成22（2010）年10月23日(土)～24日(日)
第15回	兵庫県西脇市	平成23（2011）年10月22日(土)～23日(日)
第16回	北海道富良野市	平成24（2012）年7月28日(土)～29日(日)
第17回	岡山県吉備中央町	平成25（2013）年8月31日(土)
第18回	福島県本宮町	平成26（2014）年7月19日(土)～20日(日)
第19回	群馬県渋川市	平成27（2015）年7月25日(土)
第20回	熊本県山都町	平成28（2016）年9月3日(土)
第21回	沖縄県宜野座村	※台風接近のため中止
第22回	奈良県吉野町	平成31（2019）年2月7日(木)

■ 「韓国へのそ」の訪問

隣国の韓国の江原（カンウォン）道楊口（ヤング）郡は、北朝鮮との軍事境界線に接している朝鮮半島東部の内陸に位置する自治体で、平成14（2002）年2月に韓国・北朝鮮両国をあわせた国土の中心地（国土正中央）にあたることを確認し、公式発表を行いました。楊口郡では、中心地である意味を積極的にアピールするため、毎年夏に「国土正中央 楊口おへそまつり」を盛大に開催するなど、さまざまな活動を展開していく中で、「日本のへそ」を標榜し、さまざまな活動を展開してきた西脇市を視察したいとの依頼が、楊口郡と友好都市の提携を結んでいる鳥取県智頭町を通じてありました。

同年10月21日に、楊口郡守（首長）の任璟淳（イム キョンスン）氏や楊口郡議会議長の呉興九（オ フング）氏など総勢6人の視察団が西脇市を訪問し、「日本のへそ」の説明や「へそ」を活用したこれまでのまちづくりの取組、日本へそ公園など関係施設の視察を行いました。

また、平成16（2004）年6月25日～27日には、楊口郡において開催された「韓・日へそ都市の出会いー国土正中央地域の発展のための交流・協力を模索するシンポジウム」に西脇市長が招待を受けたため、パネリストとして出席し、西脇市の紹介や「日本のへそ」を生かしたまちづくりについて発表しました。

以降も日韓両国の「へそ」を生かしたまちづくりに取り組むため、関係者による交流を継続しています。

● 江原道楊口郡

位 置： 東経128度2分、北緯38度3分

人 口： 約2万1千人

面 積： 646.8平方キロメートル



▲ 楊口郡で開催されたシンポジウム

◀ 楊口郡視察団の西脇市訪問

また、平成23（2011）年11月には、同じく韓（朝鮮）半島の中心を標榜する京畿（キョンギ）道漣川（ヨンチョン）郡が本市を訪問しました。漣川郡も楊口郡と同じく、北朝鮮との軍事境界線に接する内陸部の自治体で、今後のまちづくりの参考とするため、在日韓国大使館を通じて訪問の打診がありました。

金圭善（キム ギュソン）郡守をはじめ総勢5人の郡庁職員が本市を訪問し、「日本のへそ」としてユニークなまちづくりを展開する本市の取組について熱心にヒアリングを行うとともに、日本へそ公園などの観光施設を視察しました。初日の表敬訪問の後、來住市長自らが日本へそ公園を案内し、これまでの取組について熱く語りました。



▲ 日本へそ公園で金郡守と堅い握手を交わす來住市長

● 京畿道漣川郡

位 置： 東経127度4分、北緯38度6分

人 口： 約4万7千人

面 積： 695.6平方キロメートル

■ 「日本へそ公園」の概要

「みなおそうふるさと運動」を展開していく中で、西脇市の自己主張を「日本のへそ」と決めたことにより、経緯度交差点の存在意義を明確にしながら、新たな交流や出会いを創出する場として「日本へそ公園」の整備を進めてきました。

西脇市では「日本へそ公園」の整備を「美・感・遊・創」をイメージし、新しいライフスタイルをつくり出す活力拠点の形成を目的とした「日本のへそ・ふるさと文化公苑群構想」に他の関連拠点とともに位置付け、計画的に整備を行ってきました。

公園北側には無料駐車場を整備するとともに、公園内には鉄道利用者の玄関口となるＪＲ加古川線の「日本へそ公園」駅を設置し、駅前には西脇市出身のアーティスト横尾忠則氏の作品を常設展示する「岡之山美術館」を開設しました。また、経緯度をテーマにした「にしわき経緯度地球科学館（テラ・ドーム）」も開設しており、科学と芸術が融合する公園となっています。

その他にも、ここが日本列島の中心であることを示す「経緯度交差点標識」や平成の大測量で発見された「もうひとつのへそ（平成のへそ）」地点の「日本のへそモニュメント」、地球をイメージした世界地図が描かれた「方位の広場」や野外ステージの「銀河の広場」、さらには遊具を備えた「宇宙っ子ランド」などの施設が整備されています。

「日本へそ公園」は、天気のよい休日などには、家族連れなど多くの人でにぎわう憩いの場となっています。また、公園を会場に、西脇市の夏の風物詩である「へその西脇・織物まつり」や地元住民によるフリーマーケットなど年間を通じてさまざまなイベントも開催されており、多くの人々の交流の場としても利用されています。





どんな地域にも由緒がある地域資源があります。しかし、それをいかにうまく展開していくか、いかにまちの自己主張を個性的で感動のあるものとできるかという発想が、「日本のへそ」の背景となっています。ここには表しきれない、これまでに培ってきたさまざまな住民の取組が、現在の西脇市、「日本のへそ」を支えているのは確かです。

「日本のへそ」―

どこことなくユーモアがあり、少しコミカルな愛称ですが、まじめな演出で、わがまちながらの自己主張を行いながら、これからもふるさとづくりを進めていきます。

「日本のへそ 到達証明書」を発行



日本列島の中心・西脇市を訪問した記念の証明書を発行しています。

市役所（観光協会）のほか、道の駅など市内の施設で販売しています。（1部100円）

令和2年3月

作成・発行 西脇市観光協会